

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 大久保清朗

大久保清朗氏の博士学位請求論文『呪われた映画の詩学—「浮雲」とその時代』は、成瀬巳喜男監督の『浮雲』（1955）を取り上げ、映画作品が多くの人々やさまざまな要因が重なり合って製作されるという特徴に注目し、この映画の「出来事性」の背後にある歴史性を、外的な歴史性と作品自体の歴史性の両面から詳細に検討することで、映画における創作の過程を明らかにしようとした力作である。そこには、監督を創作行為の中心と位置づける「作家主義」に対して、作品の生成論の側から新たな映画論の可能性を追求しようという氏の意欲が伺える。

『浮雲』は、林芙美子の小説を映画化した文芸映画であり、主演は高峰秀子と森雅之、敗戦直後の日本を舞台に、一組の男女が再会と別離を繰り返し、ヒロインの病死で幕を閉じる恋愛映画である。成瀬監督の代表作とされ、これまでも監督の作品の系譜の中で多く論じられてきた。

本論文の独自性は、いわばこの語りつくされたかにみえる『浮雲』に対して、作品をめぐる資料を徹底的に調査し、各地に散在していた撮影台本や「箱書き」と呼ばれるメモなど、膨大な資料を総合的に検証したことであり、そこにはいくつかの重要な新発見が含まれている。そしてその詳細な調査から、岩崎昶と水木洋子という二人を『浮雲』を分析する上で、重要な補助線として新たに紡ぎだしたことである。なかでも、これまで注目されることの少なかった水木洋子の「発見」は、監督の成瀬巳喜男と作家の林芙美子をつなぐという脚本家の役割にとどまらず、「脚本家の政策」ともいうべき作品論の新たな可能性を示すものとなっている。

本論文は、六章からなり、これに序章と終章を加えた全八章で構成されている。序章「祝福された不幸を超えて」では、1955年の公開当時から好評だった『浮雲』の、その祝福された誕生ゆえに看過されてきた「出来事性」が提示され、第一章「映画監督とその影——成瀬巳喜男と小津安二郎」では成瀬監督のプロフィールと公開時の評論から、『浮雲』を成瀬の作品の断絶と捉える小津安二郎らの評価が提示される。

これらは導入部にあたり、歴史性の検証は、ヒロインが仏印から引き上げ日本に上陸する冒頭のシーンから始まる。第二章「帰還の風景——ある記録映画のゆくえ」では、その映像が「日本ニュース」からの流用であることが示され、これは氏の発見のひとつでもあるのだが、1946年にニュース映画を制作した岩崎昶と1955年の成瀬の演出の比較から、「戦後」の表象の断絶が浮き彫りにされる。この岩崎と成瀬の関係は、十分に論じる価値のあるテーマであり、46年と55年のふたつの「戦後」の時間差と表象の齟齬は、『浮雲』にお

ける「複数の今」を提起するものとして、審査委員から評価された。

第三章「ふたつの時代のはざままで——戦後の齟齬」では、55年の『浮雲』において、46年の「再現された戦後」を描き出すために、スタッフの戦中・戦後体験やそれぞれの俳優のさまざまな「戦後」イメージがどのように活用されたかが分析される。

だが、本論文の中心をなすのは、作家と脚本家さらに監督の三者の関係性を分析する第四章から第六章である。第四章「南の誘惑——林芙美子の南方体験」では、戦後の短編『ボルネオダイヤ』を軸に、46年から51年に没するまで林が描いた多くの「南方」の表象の変化を分析し、林が戦中の南方で享受した快樂に忠実であったことを「自然と人のたわむれ」というフレーズの変奏として指摘する。

第五章「作劇と情熱——水木洋子のシナリオ作法」は、本論文の白眉ともいえるべき章であり、演劇作家から放送作家、映画からテレビへと活躍を続けた水木の脚本家としての仕事の全体像を、おびただしい生涯資料を整理し、検証したものだが、このような分析はこれまでほとんどなされなかったものである。氏は、林と水木の戦中の共通する南方体験を明らかにし、『浮雲』の脚本の構成ノートである「箱書き」を読み解くことで、水木の脚色の特徴を、原作に忠実でありながら、語りの配置の圧縮と変換によって、小説に潜在していた情念を引き出したことにあるとする。原作を改変してヒロインの死で終わらせたラストシーンは、原作への裏切りに見えて、より深い共振であるとした点も、本論の成果のひとつであろう。

第六章「終わりのない映画——成瀬巳喜男と変容する映画」では、ラストシーンの成瀬監督の演出が分析され、脚本家と監督の協働が論証される。ただ、成瀬側からの『浮雲』自体の記述や映画自体の記述が不足しているのではないかという指摘が、審査委員からなされた。

『浮雲』という成瀬巳喜男監督の代表作を、あえて作品の生成から論じ、その「出来事性」の分析から、戦後という時代を描き出そうとした氏の意図は、監督と作家、脚本家という三者の関係から創作の過程を捉えようというものであり、その作業は水木洋子という脚本家の「発見」と分析から、ひとつの成果を上げえたものと評価される。生成から論じるという本論文の意図を論文題名でより明確にし、序章と第一章の構成を厳密にすべきであろうという指摘が、審査委員からなされた。記述のケアレスミスや論拠の補強が必要な個所も見られたが、本論文の論考の成果を損なうものではないという点で、審査委員の意見は一致を見た。

したがって、本審査委員会は全員一致で、大久保清朗氏の提出論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。